

# 資料渉猟余話

その135

昨年末、何人かの

きし人あり 超空

手を経て、以前教職に就かれていた吉田(旧姓小木曾)サチ

変体仮名であろうえに、一字分破損があり、読むのに多少時間を要したが、著名な名歌なので何とか読めた。作者超空

見れば、かなり年数を経た短冊に書き慣れた流麗な仮名文字で、次の短歌が記されている。

くず(の)花踏みし  
だかれて色あたら  
し この山道を行



折口信夫

短冊の裏を見る。一首の読みと記をした際と、鉛筆の添え書きもあ

研究に基を置いた学問の領域は広く、国文学・民俗学・国語学・宗教学・芸能史にわたって独自の学

## 折口信夫と下伊那教育会

一枚の短冊に寄せて

鎌倉 貞男

渡り、既に九十年近く経過したことになる。

折口信夫(一八八七-一九五三)は、

国学院大学教授・慶應義塾大学教授・文学博士である。古代

育会史 百周年史

(昭和六十二年・同教育会刊) 他で確認

『口沢万葉集』など多数。また釈超空の名でも知られ、歌集『春のことぶれ』

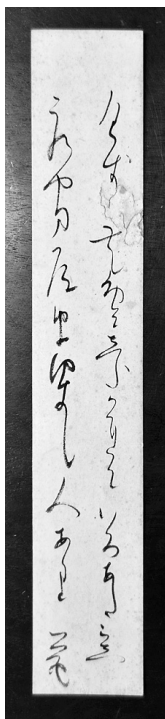
『口沢万葉集』など多数。また釈超空の名でも知られ、歌集『春のことぶれ』

他、詩集『古代感愛集』(芸術院賞) 他、小説『死者の書』等

『春のことぶれ』 日の二日間「言語及び言語伝承論」と題して、下伊那教育会

全集により、芸術院恩賜賞を受ける。その折口が、果して昭和八年に下伊那

小学校(現阿智第一小)である。記載月に多少の相違もあるが、先の短冊はこの折口書かれたと思わ



れる。時に、折口は

の最初の歌でもあ

右の一首は超空の代表歌である。当該歌は、彼の処女歌集『海やまのあひだ』

その「島山」とは一体どこなのか、また何なのか判然としないが、右の歌群に「沖の小島」とか

第三支会(阿智支社刊)に載る。この歌集は、明治後期から大正十三年までの

「荒磯」とか歌われているので、これら折口と下伊那教育会

の詠歌はどこかの島で詠まれた可能性が強い。

そう考えると、「島山」も地名等ではないが、実は両者にはこれ以上の大きな関係がある。

(故人敬称略)